

山と博物館

第47巻 第7号 2002年7月25日

市立大町山岳博物館



2002.6.19 撮影

写真と文 峰村 隆

雪形発見！ その意味
写真の中央の山は、梅雨時の晴れ間に山岳博物館から望んだ残雪の南沢岳（二六二五m）だ。昨年、私はふとその残雪紋様に白馬、それも天驅けるペガサスを見てしまった。そうなるともう馬にしか見えなくなるのだから、人とは困ったものである。

大町市は本年の春に「山岳文化都市」を宣言した。そのファンファーレ的イベントとして五月から六月にかけて『第一回 北アルプス雪形まつり』が開催され、実行委員会諸氏・団体の活躍により芸術文化関連の多彩な催しを開催した。その一環として「雪形ウォッチング」や「雪形写真展」も行われ、私も手伝つた。

ウォッチングの車中や写真展での解説の中心はいわば伝統的な安曇野の雪形であり、山の名前だ。

「えーあれが種まき爺さんの雪形で有名な爺ヶ岳でございます。えー実は爺さんは最初は赤ん坊でして、へそあたりの黒い点が成長して立派な爺さんになり、種まきの仕事を終える六月初旬には野良着姿で鉤をついて消えてゆくんですよ。ほらあれ、あれですよ。」

こんな調子のおしゃべりを何度も聞くうちに、私のうちに一種の後めたい気持ちが少しずつ沈殿していく。「なぜ雪形は種まき爺さんで、山名は爺ヶ岳でなければならないのか。それだけを一方的に伝えるばかりでよいのだろうか」と。

江戸時代の爺ヶ岳の名は、大町では北峰および中央峰を「五六岳」として南峰が「祖父ヶ岳」だったり、越中側では「梅山」や「梅谷峯」だったりした。眺める場所によって山容も風土に根ざした見る人も異なるのだから、信州側には特に、他にもさまざまな地方名があつたはずだ。それはどの山も同様だろう。

またこの爺さんが苗代の適期を知らせる天与の農事暦だったとして、実際いつごろ現役で活躍していたのか定かではない。江戸時代も下るほど農業の技術や知識も向上して雪形を目安にすることはなかつただろうとの見方もある。人の名前と同様に、共通理解のために山名の由来や言い伝えの過程を偲びつつ、古名や現在の統一名を押さえておくことは肝要だ。

だがまたこれも人名同様に、今を生きる人々の感性でその特徴をとらえたニックネームをつけて愛でれば、いつそう山は自己の根っこに定着し、認識が深まるはずである。

残雪と岩肌の山々に心放ち目を遊ばせて自分だけの雪形を見つけることは、そのための最も手軽で良いきっかけとなる。ただし私も「南沢岳こそ白馬岳だ」と醉つて吹聴すべからず、「南白馬岳くらいかなあ」などともブツブツ云うべからず。人の性を肝に銘じ、雪形を愛好し続けたいものだ。

大町市におけるクロツバメシジミの生息状況

清水博文

長野県大町市には、北アルプス槍ヶ岳の北側を源とする高瀬川がある。高瀬川の上流部の勾配は急流で深いV字谷を形成しているが、下流部の広大な氾濫原にはクロツバメシジミが生息している。

深尾（一九八九）によると、高瀬川の河原、堤防にはクロツバメシジミの生息地があり、人為や植生の遷移による環境の変化を受け、生息個体数の変動がみられていると報告されている。

大町市では近年本種の生息地で工事開発が行われており、その影響等本種のおかれている現状を把握することを目的として発生個体数、生息環境、食草（ツメレンゲ）の自生状況についての調査を実施した。この報告ではクロツバメシジミの生態についてとあわせ紹介する。

調査方法および調査地

大町市における分布調査として、生息地の確認とその環境、食草の自生状況について観察調査した。二〇〇一年は、主に食草の分布と環境、生態観察をとおして発生回数の確認を実施した。

大町市平野口から北安曇郡池田町までの高瀬川河川敷左岸を中心に踏査した。高瀬川右岸についての大半と、平地区については未調査域が多いので再度調査する計画で



写真1. 交尾中のクロツバメシジミ



写真2. 食草のツメレンゲ

ある。

大町市を調査対象地域としているが、生息地の前後との関連をみると近隣町村にわたって調査した。

調査は筆者単独で行い、調査期間は二〇〇

分布

本州関東以西、四国、九州、壱岐、対馬に分布しているが、分布は不連続で生息地は狭く限られている。特に西日本では生息地が減少しているといわれており、新潟県にも生息地があるが、長野県は北限に近い。

全国的にみると特に生息地が多いといわれているが、近年は減少傾向にあるといわれている。

食草

本種の幼虫の食草（餌）はベンケイソウ科のツメレンゲ、イワレンゲ、オノマンネングサなどがあるが、大町市付近ではツメレンゲの利用が確認された。こ

のツメレンゲも環境省および長野県のレッドデータブックでは準絶滅危惧に該当している（写真2）。

訪花植物

成虫の蜜源植物として今回の調査では、ノミノツヅリ（ナデシコ科）、イヌナズナ（アブラナ科）、ツメレンゲ（ベンケイソウ科）、カワラサイコ（バ

クロツバメシジミ

Tongeia fischeri (Eversmann)

前翅長（前ばねの付根から先端までの長さ）は十二から十四ミリメートルの小さなシジミチョウで、翅の表は黒褐色で後翅には短い尾状突起がある（写真1）。

環境省のレッドデータブックによると、本種は準絶滅危惧（NT）に指定されている。長野県のレッドデータブック（昆虫）はまだ発表されていないが、県の重要な昆蟲として選出されている。

石を使用していても勾配四十五度以上ではほとんど見られない。また、石と石の隙間に練りをしたものと大きな差はない。緩い勾配護岸では凹凸に適度な土が入り食草が生えやすくなる。適度な乾燥が他の植物の侵入を防ぐ。

一般に他の蝶類は森林化がある程度進むとす

み易くなるが、本種の場合異なるという。

周年経過

年多化性で暖地では四月下旬より第一化が始ままり、十一月下旬ころまでに年四から五年で発生し、寒冷地では年三回程度発生する。越冬は幼虫で二齢から終齢と一定でないといわれている。

生息地

食草であるベンケイソウ科の植物が自生している。

本種の幼虫の食草（餌）はベンケイソウ科のツメレンゲ、イワレンゲ、オノマンネングサなどがあるが、大町市付近ではツメレンゲの利用が確認された。こ

てはいる河原や崖などの露岩地に生息する。いずれも日当たりの良い場所に限られている。

田下（一九九六）によると、本種は草原的な明るい環境の原始段階の環境階級に生息している。練石張護岸（石と石の隙間にコンクリートを充填）、空石張護岸に多く見られ、

ラ科)、イブキジャコウソウ(シソ科)、カワラハハコ(キク科)、ニラ(ユリ科)などの利用が確認された。

九月から十月には幼虫の食草でもあるツメレンゲが良く利用されていた。このことは、ツメレンゲに対する依存が高く成虫があまり生息地を離れないことを示唆していると考えられる。(写真3)。

幼虫の体色は緑色から赤紫色まで変異が知られており、後者は低温期に多いといわれている。また、終齶幼虫にはアリと一緒にいることもよく観察された。共生関係にあるようでも捕食されることはないようであった（写真5）。

今回の調査では越冬場所を探している幼虫の観察をする機会があつた。二〇〇一年十一月十九日に、食草の大半が枯れロゼット状となっているものが多くなつた頃、食草より根元付近の地面に降り、さかんに這いまわつて

食草に蛹化した場合は緑色型、他の場所の場合は褐色型になるといわれているが、今回



写真4. ツメレンゲに産卵された卵（白い点）



写真3. ツメレンゲで吸蜜するクロツバメシジミ

色で、中央部が少し凹んだ形をしている。葉の裏面に一個づつぱらぱらに産卵されているものがほとんどであつた。

一つの食草に多く産卵されている場合は、無精卵が多いようであつた（写真四）。

若齢幼虫は葉の内部

に潜り込んでいる場合なかなか見つけにくいため、排出された糞を目に探し、また、終齢幼虫の場合、食草の中に潜り込みます。体を露出させて、いる個体が多いと観察できた。

幼虫の発見場所は生息地の中心部より周辺部の方が多く発見され
る傾向が見られた。

幼虫の体色は緑色か
知られており、後者は低
ている。

兵生関係にあるようで捕獲された。ようであつた（写真5）。



写真6. 越冬場所を探しまわる赤紫色の幼虫（△印）



写真5. 終齢幼虫とクロオオアリ

調査結果の概要

飛翔しているのを観察した。

*
一〇〇一年において最も生息環境の良い地区における成虫の発生ビーカ時は五月上旬と十月上旬の約五〇個体が最大であり、六月末から九月中旬までは常時成虫が確認された。
*二〇〇一年の成虫の発生回数は、確認された個体数のピークより、四月下旬から五月上旬、六月下旬から七月上旬、八月上旬、十月上旬の年四回発生したと考えられる。発生回数は気候の影響を大きく受けるため、例年は三回の可能性が高いと考えられた。
*赤紫色を帯びた幼虫の出現は九月中旬より確認された。また、このとき緑色の幼虫と両方の型が同時期に確認された。

*大町市では、高瀬川に沿つて広く生息しているが、良好な環境があり発生個体数が多いところは限られていた。



写真8. 良好的な生息環境

護岸上部から河原の冠水する付近にまで食草が認められる。蜜源植物も多い。

に多くみられた。また、そのほとんどは、護岸工事が行われてから二十年から三十年程度は経過している場所と思われた（写真8）。この建設時期については、長野県大町建設事務所によると、高瀬川の護岸工事の時期に



写真7. ツメレンゲの根元の蛹 (緑色型)

ついで古い工事は書類が残っておらず正確には判らぬが、護岸の工法により推定できる。そこで、一九九五年ころより自然石が不足したためコンクリートブロックを使用し始めた。一九六五年までは自然石と混在し、それ以後はコンクリートブロックの使用比率が高くなる。自然石のみの使用は一九七〇年ころまでと

説明をいただいた。

*過去に生息記録のある場所で、植生の変化による影響を受けチヨウが生息できなくなつたと考えられた場所が確認された。これは、食草が自生しているが、草丈のある植物が侵入してきたため、食草が覆われてしまい、開けた空間を好む本種が生息できなくなつたと考えられた（写真9）。

*人為の影響を受け生息できないと考えられる場所として、野焼きの影響を受けていると思われる場所を二ヵ所確認した（写真10）。

*大町市の現状としては、本種は限られた環境にしか生息していないため市民のほとんどの方は目にすることが無いと思われるが、希少種とまではいえないであろう。しかし、全国的な規模で見るとどんな河川や崖などでも普通に見られるという種ではない。

本種は本来河川の氾濫などにより食草の生息環境が維持されていたと考えられるが、現



写真10. 葉の先に焼け跡が認められるツメレンゲ



写真9.

ツメレンゲは認められたが植生の変化によりチヨウが生息していない地区（過去に生息記録がある）

今後の課題

未調査地のある高瀬川右岸および他の河川敷での調査。幼虫の体色に変異があるがその出現についての調査研究。

また、継続的に発生数を把握し、環境変化による影響の調査を行う必要性を感じている。

（大町山岳博物館学芸員）

文献

福田晴夫ほか（一九八四）原色日本蝶類生態図鑑（III）、保育社。

深尾哲夫（一九八九）長野県安曇野におけるクロツバメシジミの衰亡、日本産蝶類の衰亡と保護 第1集・108-111、日本鱗翅学会。

田下昌志（一九九六）河川護岸工法とチヨウ類群集の多様性、日本産蝶類の衰亡と保護 第4集・119-139、日本鱗翅学会、

山と博物館 第47巻 第7号
（一九九六年七月二十五日発行）
発行 長野県大町市大字大町八〇五六一
市立大町山岳博物館
TEL 026-1-221-0221
FAX 026-1-221-2233
定価 大判 タイムス
年額 1,500円（送料込）（切手不可）
郵便振替口座番号 0040-171-3353